

新幹線開業に伴う地域の変化 ～奥津軽いまべつ駅周辺の変化～

調査研究部 主任研究員 木村 政希

はじめに

当センターでは、2014・2015年度の2 ヶ年に亘り地域3シンクタンク（はまなす財団・青森地域社会研究所・ほくとう総研）と共同で「新幹線ほくとう連携研究会」を立ち上げ、北海道新幹線開業を広域的交流・連携促進の好機と捉え、北海道新幹線の直接的・間接的な開業効果を洗い出しながら経済、生活、文化などさまざまな視点から北海道と東北の交流・連携の機会について研究を行ってきた。

開業から1年が経過し、実際に沿線地域がど

図1：北海道新幹線路線図



資料：青森県東青地域県民局

のような変化を遂げたかについて、北海道新幹線と開業2年を迎えた北陸新幹線の駅周辺において昨年度調査を行った。今回・次回の2回に分けてその内容について報告することとしたい。

北海道新幹線と奥津軽いまべつ駅の現状

北海道新幹線は、計画から46年後となる昨年3月26日に新青森－新函館北斗駅間148.8キロが開業した。青函トンネル内は貨物列車と共用のため最高速度が時速140kmに制限され、在来線時代と比較して大幅な時間短縮は実現出来なかったものの、仙台から新函館北斗までの間が乗換えなしの2時間半で結ばれ、東北と北海道が文字通り大きく近づいた。

先日 JR 北海道が発表した開業後1年の利用実績では合計で約230万人、1日平均で6,300人ほどの利用があり、在来線時代の1.6倍となっている。これは開業前の予測を3割ほど上回る値である。(表1)

開業直後の2週間・1ヶ月と比較した乗車率(座席数に対する利用者数)も27%から32%と増加し、着実に青函圏を結ぶ新たなルートとして定着しつつある。

1 国土交通省運輸審議会公聴会(2016年11月26日開催)におけるJR北海道社長発言から推定

表1：北海道新幹線の利用実績(単位：人)

開業後	開業前	前年比
6,300	3,800	164%

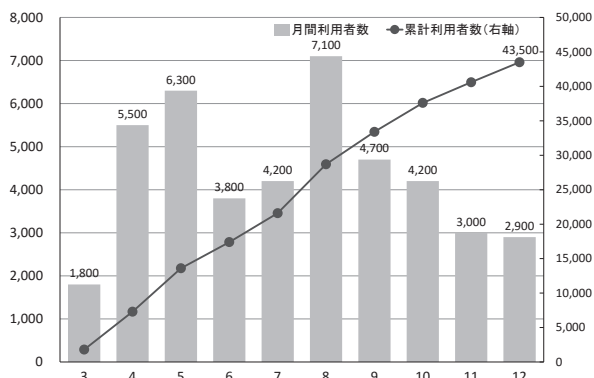
資料：JR 北海道

北海道新幹線開業に伴い、青森県内にも東津軽郡今別町に奥津軽いまべつ駅が誕生した。奥津軽いまべつ駅には1日13往復ある北海道新幹線のうち7往復が停車することとなった。フル規格新幹線が停車する自治体の中で人口規模が最も小さいことから利用者数が懸念されていたが、予想を上回る利用状況となっている。駅周辺の状況を考慮すればかなり健闘しているといえるであろう。



写真：奥津軽いまべつ駅

図2：奥津軽いまべつ駅利用者数
(新幹線乗降客・入場券利用者)



資料：今別町役場資料を基に東北活性研作成

広大な自然の中に駅は立地しているため、駅からの2次交通として、開業に合わせてバスとレンタカー等が用意された。

バスは町内巡回バスが竜飛崎のある隣の外ヶ浜町を結んでいるほか、広域周遊ルート構築に向け、山を隔てた西北津軽地域にも連絡バスが県と周辺自治体の協力により運行されている。



写真：奥津軽いまべつ駅にて出発を待つ連絡バス

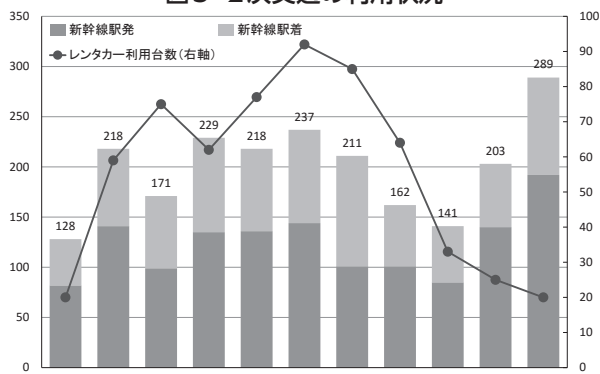
レンタカーについては、ジェイアール東日本レンタリースと委託契約を結び、町が運営する「道の駅いまべつ 半島プラザスクール」に受付カウンターを設置している。

2次交通の利用状況については図3のとおりである。



写真：道の駅に設置されたレンタカーの受付窓口

図3：2次交通の利用状況



資料：今別町資料を基に東北活性研作成

当初1便あたり4人の乗車を想定していた連絡バスであるが、現状で平均利用者数は1人を割る状態となっている。原因として観光客等への知名度不足などがあげられており、現在、チラシの作成・配布などを通じ、周知拡大の対策が実施されている。



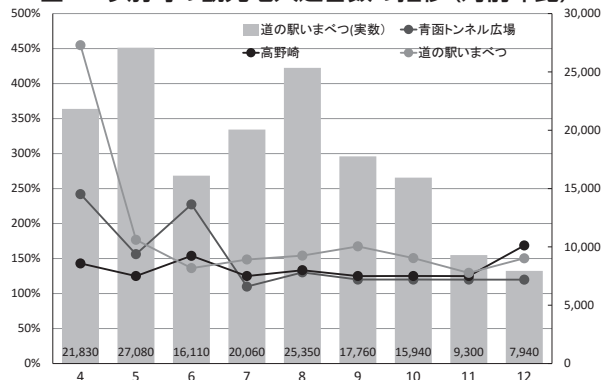
写真：連絡バスのチラシ

レンタカーについてはビジネス需要を中心に順調に推移している。予約中心の営業となっていることから予約無し需要に対応できないことが課題となっている。

今別町の代表的な観光スポットとしては前述

の道の駅や景勝地である高野崎、青函トンネル入り口広場などがあるが、それぞれのスポットの入込状況を示したグラフが図4である。

図4：今別町の観光地入込客数の推移(対前年比)



資料：今別町資料を基に東北活性研作成

図4からもわかるとおり、各地点とも新幹線開業を契機として大きく伸びていることがわかる。特に新幹線の駅に隣接して立地している道の駅についてはリニューアルオープン以前の10倍近い来訪者があり、新幹線効果をもっとも発揮されているエリアであるといえる。



写真：道の駅いまべつの外観(上)と品揃えが充実してきた店内(下)

今別町における変化

新幹線開業に伴って地域はどのように変化したのであろうか。駅が立地する今別町で新幹線対策のみならず広く町の政策運営に携わられている角田真士今別町参事・総括政策監にお話を伺った。



写真：角田今別町参事・総括政策監

角田氏によれば、新幹線開業に伴う変化で最も大きなものとしてあげられるのが町民の郷土に対する誇りや郷土愛の向上であるとした。

今別町には江戸時代から田植え後に踊られ、県の無形文化財となっている荒馬^{あらま}という行事がある。この地域の誇りである行事は北海道新幹線開業をPRする場においてたびたび披露され、「今別町＝荒馬の里」であることをアピールしてきた。こうした場などを通じて、多くの人から高い評価を得たことが、町民意識の変化を生んだ要因であると分析している。

この荒馬に対する関心の高さを示したのが昨年8月に開催された荒馬まつりである。北海道新幹線開業に合わせ、これまで8月4日に固定していた合同運行を曜日重視に変更し、昨年

は8月6日(土)にしたところ、入込客が約11,500人から12,800人と1割近く増加した。

今別町の人口が2,835人(2017年1月末現在)であることから、この祭りの規模がいかに大きいかということを理解していただけたと思う。



写真：荒馬まつりの様子(写真提供：今別町)

また新幹線の開業を契機に、草の根の広域交流も始まっている。今別町では北海道新幹線開業を記念し、町民による新幹線利用促進を図るため「今別町北海道新幹線助成金」制度を昨年度設けたが、津軽海峡対岸にある北海道知内町との交流事業が行われたり、老人会などのグループで新幹線を利用し、北海道へ旅行に行くなどというケースが見られたとのことである。昨年の荒馬まつりには北海道江差町の方が参加し、道指定無形民俗文化財の「江差餅つき囃子」を披露するなど、相互の交流も行われている。

さらに、新幹線を生活の一部として利用する動きも見られる。これまで、今別町からは列車時刻の関係から青森市内の高校へ進学する場合、部活などができず、下宿する生徒も多かった。しかし、新幹線開業に伴って新青森駅までわずか15分で行けるようになったため、新幹線通学が可能となり、町ではそれに合わせて新幹線を含めた公共交通機関を利用して町から他

2 今別町にある今別荒馬・大川平荒馬・二股荒馬の3つが同時に披露される日のことである。

の自治体に通学する生徒を対象に定期代の1/3を補助する制度を設けた。この制度を活用して新幹線で青森市内に通学している生徒が2名おり、今年度はダイヤ改正により接続が改善され、さらに進学先の選択肢が増えたことにより、制度利用者が増加する見込みであるとのこと。

加えて、駅を活用して地域の活性化に向けた取組みも始まっている。

昨年10月からは定期的に駅舎内のエントランスにおいて「奥津軽いまべつ駅おもてなしイベント」が開催されている。これまで、きんたまめじょ金多豆蔵人形芝居、津軽三味線の生演奏、シャンソンミニライブなどが開催され、150～200名ほどの来場者で賑わったとのことである。



写真：イベントが開催されるエントランス

イベントを間近で体験するには入場券を購入することとなるため、広い意味で駅の利用者増に結びついている。また、開催に際しては他の自治体からの協力を得て行うことも多く、地域間連携の強化にもつながっている。

今別町では最近新規採用される職員が多いことから、若手職員を起用した活性化にも取り組んでいるとのこと。昨年12月8日に町長によ

る委嘱で4つの「若手職員プロジェクトチーム」が発足。各チームが駅前のイルミネーションの点灯や若者との意見交換会、婚活イベントなどを実施し、町内の活性化に一役買っている。



写真：22名の若手職員への委嘱状交付式の様子
(写真提供：今別町)

さらに今年2月には今別町が青森県フェンシング発祥の地であることを生かした「フェンシングの聖地いまべつ」拠点整備事業が地方創生拠点整備交付金事業として採択された。

この事業は駅から200mほどにある土地を活用して日本で唯一のフェンシング専用施設を始めとした合宿施設などを建設するものである。フェンシングで利用しない期間については一般のスポーツ合宿や町民の健康づくりなどにも活用されることが予定されている。

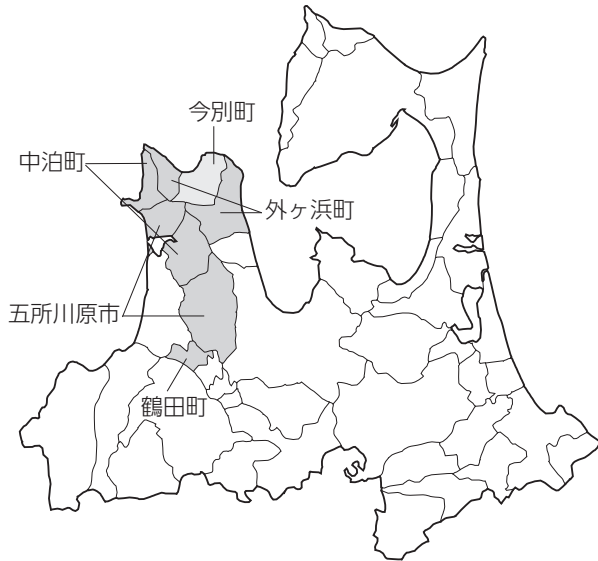
計画では5年間でフェンシング大会16回、合宿利用者数約1,100人、大会観戦などによる交流人口増加数200,000人弱を目指しているとのこと。

今別町は県内でもトップクラスの高齢化が進む町ではあるが、新幹線開業を契機として新しい活気のある町へと変化しつつある。

周辺自治体の変化

続いて隣接市町の状況について、今別町同様ヒアリング内容を基にまとめていくことにする。実施したのは今別町のほか図5の1市3町である。

図5：ヒアリング実施自治体



■五所川原市－競争の激化に伴う市内間格差増

北五津軽地域の中心都市である五所川原市は立佞武多の館や太宰治記念館「斜陽館」など観光資源に恵まれた地域でもある。五所川原市などにおける観光入込客数の変化を表2に示す。

五所川原市の観光施設の中心とも言うべき立佞武多の館は増加しているものの、そこから北に向かうにつれて入込客が減少。旧市浦村に位置する道の駅十三湖高原(トーサム)は前年比でマイナスとなっている。

これは観光地が多様化したことにより移動距離が拡大し、五所川原市内での観光時間を確保するのが難しくなったためではないかと市では分析している。

実際、昨年7月から9月まで実施された青森県・函館デスティネーションキャンペーン(青函DC)の期間中、市内の宿泊施設の利用状況が前年比105%であったにもかかわらず、入込客数が前年割れとなっていることからこの原因を伺うことが出来る。



写真：立佞武多の館

広域観光の足となる津軽鉄道であるが、DC期間中、また津軽鉄道の代名詞でもある「ストーブ列車」の期間³ともに10%以上の減少となっており、周遊ルートを磨き上げ、他の地域に負けないものにしていくことが今後求められる。



写真：ストーブ列車の車両(左)とその車内(右)

■外ヶ浜町－地域ごとに明暗

外ヶ浜町は蟹田町・三厩村・平館村の3町村が2005年に合併して発足した町で、今別町を間に挟む形となっている。

三厩地区には青函トンネル記念館や竜飛崎、階段国道などといった青函海峡にまつわる観光

3 ストーブ列車の運転期間は12月から3月までであるが2月までの実績である。

表2：奥津軽いまべつ駅周辺自治体の観光入込客数⁴（観光地点とイベントの参加者数の合計）

自治体名および観光地点・イベント名	入込・参加客数		対前年比
	2016年	2015年	
今別町	259,013	148,311	175%
青函トンネル広場	24,185	17,971	135%
高野崎	30,687	23,317	132%
道の駅いまべつ 半島プラザアスкул ⁵	191,370	95,530	200%
五所川原市 ⁶	392,586	387,147	101%
立佞武多の館	120,291	107,985	111%
斜陽館	84,558	81,207	104%
道の駅十三湖高原（トーサム）	92,754	93,749	99%
外ヶ浜町	318,069	314,935	101%
青函トンネル記念館	30,092	28,458	106%
竜飛崎展望所	43,861	40,768	108%
トップマスト	12,575	18,502	68%
中泊町	264,656	246,253	107%
道の駅こどもり	47,049	41,437	114%
折腰内海水浴場	15,910	14,231	112%
竜泊ラインウォーク	306	176	174%
鶴田町	509,503	482,211	106%
富士見湖パーク	63,361	33,327	190%
丹頂鶴自然公園	12,393	5,713	217%
その他	402,449	402,771	100%

スポットが多いことから、開業前と比較して観光客が増加している。

一方、蟹田地区は新幹線開業前、津軽海峡線を走る「スーパー白鳥」など全列車が停車する

本州の玄関口としての機能を果たしていた。しかし新幹線開業に伴って在来線の特急列車が廃止された影響もあり、その機能の低下が見られる。

4 各年1～12月までの合計値

5 道の駅アスкулは2015年3月改装オープン後の数値

6 主要観光施設5箇所の合計値



写真：竜飛崎灯台

蟹田地区にあるトップマストの入込客数が3割を超す減少と大きく落ち込んでいる。トップマストは津軽半島と下北半島を結ぶむつ湾フェリーの蟹田港に近い場所にあり、フェリー利用者が多く利用することから、当初期待された津軽半島と下北半島を周遊して観光するルートはまだ利用されていないことが考えられる。

町では「歩く旅」にフォーカスを当てた観光パンフレットを作成したほか、平館地区において廃校を利用し、教育観光に利用できる施設の整備を進めている。



www.town.sotogshama.jp
 〒010-0001 青森県津軽郡中泊町中泊1-1-1 TEL.0174-31-1111
 〒010-0002 青森県津軽郡中泊町中泊2-1-1 TEL.0174-31-2111
 〒010-0003 青森県津軽郡中泊町中泊3-1-1 TEL.0174-31-3111
 〒010-0004 青森県津軽郡中泊町中泊4-1-1 TEL.0174-31-4111
 〒010-0005 青森県津軽郡中泊町中泊5-1-1 TEL.0174-31-5111
 〒010-0006 青森県津軽郡中泊町中泊6-1-1 TEL.0174-31-6111
 〒010-0007 青森県津軽郡中泊町中泊7-1-1 TEL.0174-31-7111
 〒010-0008 青森県津軽郡中泊町中泊8-1-1 TEL.0174-31-8111
 〒010-0009 青森県津軽郡中泊町中泊9-1-1 TEL.0174-31-9111
 〒010-0010 青森県津軽郡中泊町中泊10-1-1 TEL.0174-31-0111

歩く旅、見えてくる。中泊町。
 Slow Travel is Busy

写真：外ヶ浜町作成のパンフレット

■中泊町—新たなゲートウェイへ

新幹線開業に伴って新たに西北津軽地域のゲートウェイとなったのが中泊町である。

中泊町も中里町と小泊村が2005年に合併して発足した町で、外ヶ浜町同様五所川原市市浦地区(旧市浦村)を間に挟む形となっている。

町内の主要な観光スポット・イベントについてはいずれも新幹線開業後、入込客数が増加しており、道の駅こどもりでは前年比で13.5%の増加、昨年6月に開催された竜泊ラインウォークでは73.9%の増加となった。

新幹線からの連絡バスの行先となった津軽鉄道の津軽中里駅では駅舎内のスーパー跡地を利用して「駅ナカにぎわい空間」を設置。この空間を活用して多くのファンを有する「金多豆蔵人形芝居」(中泊町無形文化財)を定期的に上演しているほか、イベントなどが頻繁に開催され、文字通り「賑わい」を呈している。



写真：「駅ナカにぎわい空間」のある津軽中里駅

また、県内トップの水揚げ高を誇るメバルをご当地グルメとして売り出しており、「中泊メバル膳」(中泊メバルの刺身と煮付け膳)を開発。1年半超で35,000食が提供されるなど大きな反響を呼んでいる。

今後はこうした「食」のみならず、その背景にある「人」や「資源」の魅力を発信していけるよ

う努力していくとのことである。

取組み事例として、町内の青森県立中里高校では生徒が中心となり、地域資源を活かしたビジネスのひとつである「ソーシャルビジネスプロジェクト (SBP)」が発足。他校とも連携しながら地域のセレクトギフトを開発・販売している。



写真：中里町長と中里高校SBPメンバー(左)と内容(右)

■鶴田町一広告の効果もあり大幅な入込増

今回の取材の中で最も新幹線効果を感じるといふ答えがあったのが五所川原市の南に位置する北津軽郡鶴田町である。鶴田町は町内随一の観光スポットである津軽富士見湖にかかる日本一の木造三連太鼓橋「鶴の舞橋」がJR 東日本の運営する「大人の休日倶楽部」のCM 撮影場所となったことから関心が急増し、CM が公開された2016年6月から図6に示すように町の観光サイトのアクセス数がこれまでの10倍を超える勢いで増加した。

これまでは駅などからのアクセスが難しかったこともあり、実際に現地を訪れる人はさほどではなかったが、町が青函DCにあわせてバス・タクシーによる2次交通手段を整備したことに加えて、観光バスによる来訪も増加したことから、入込者数が増加している。



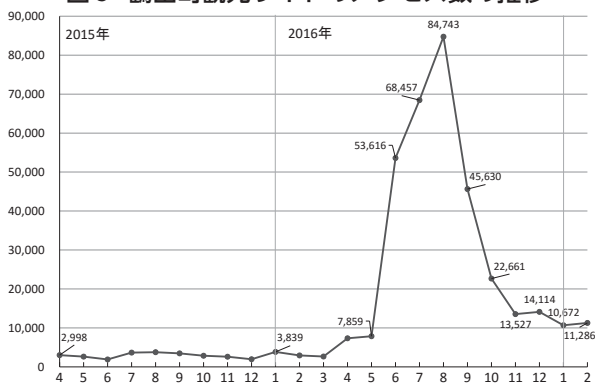
写真：鶴の舞橋

さらにこれまで降雪に伴う事故防止のため、冬季間は橋の横断を禁止していたが、今シーズンからは除雪体制を整えて通行可としたため冬季間の来訪者も新たに増えている。

町では今年度から観光ガイドを公募。町が実施する講習を通じてガイドを育成し、事業者などからの要望に応じて添乗ガイドを実施するほか、富士見湖パークなどで定期的に案内の実施を計画している。

関心の高さは現在も続いており、津軽の新たな周遊ルートの一つとして定着しつつある。

図6：鶴田町観光サイトのアクセス数の推移



資料：鶴田町資料より東北活性研作成

今後の活性化に向けて

これまで、開業後1年を迎えた北海道新幹線奥津軽いまべつ駅周辺の変化について、近隣自治体へのヒアリングを踏まえてまとめた。

北海道新幹線開業後は函館を中心とした道南エリアの盛況ぶりを報道で目にする機会はあったものの、もう一方の開業エリアである青森県については余り目にする機会は多くなかった。

しかし、今回の取材を通じて、開業を活かして地域活性化に結び付けている例を目にすることができた。

一方、ヒアリングを行う中において各地で「温度差」という言葉が度々聞かれた。開業を活かそうとする人・地域とそうでない人・地域が存在し、地域全体で活性化を図っていくという一体感が得られていないということがこの言葉の背景にあるものと思われる。

少子高齢化が進む中、他地域と交流を密にし、地域を活性化していくことは青森県に限らず東北圏すべての地域に求められることは言うまでもない。開業1年を経過した今こそ地域で改めてこの貴重なインフラを活用するためにはどうすればよいか考えるべきではないだろうか。

また、開業を特効薬として捉えるのではなく、長期的な視野で見えていくことも必要である。

本文中、連絡バスの利用者が伸びないという話があったが、津軽鉄道の列車に毎日乗務し、観光客の動向を日々目の当たりにしている津軽半島観光アテンダント協議会の方の話によれば、絶対数は多くないものの、週に数人は今回整備された周遊ルートを用いて観光しているとのこと。加えて、インターネットなどを通じてこのエリアを知った外国人の個人旅行者(FIT)の動きが多くなってきているとのことである。

FITも入込客数ベースで見れば絶対数は多くないものの、今後リピーターのインバウンド旅行者が増加してくることが予想される中、「旅慣れた人に選ばれる地域」であることは今後発展の可能性が非常に高いと思われる。

大河の流れも一滴から始まるように、こうした小さな兆しを見失うことなく大切に育み、大きな人の流れへと導いていく必要があるのではないだろうか。

新しい変化を好機と捉え、「地域の誇り」を他の地域へ伝えられるよう、今後も地域の方の奮闘に注目していきたい。

謝辞

本稿の執筆に際しては今別町・五所川原市・外ヶ浜町・中泊町・鶴田町の職員の方をはじめ、津軽半島観光アテンダント協議会の方から貴重なお話を頂戴いたしました。この場を借りてお礼申し上げます。

【参考・引用文献】

- 青森県東青地域県民局(2015)「北海道新幹線奥津軽いまべつ駅開業に向けて」『れちおん青森』2015年4月号 青森地域社会研究所
河北新報 2016年04月26日・2017年3月23日付朝刊
広報いまべつ 2016年8月号・9月号、2017年1月号
広報なかどまり 2016年6月号～2017年2月号
JR北海道プレスリリース「北海道新幹線のご利用状況」2016年4月13日
JR北海道プレスリリース「北海道新幹線開業後1ヵ月間のご利用状況について」2016年4月26日
JR北海道プレスリリース「北海道新幹線 開業1年のご利用状況について」2017年3月27日
津軽半島観光アテンダント協議会 Facebook ページ (<https://www.facebook.com/tsugaruhantoat/>) 2017年4月5日最終閲覧
日本経済新聞 2016年11月26日付電子版 (http://www.nikkei.com/article/DGXLASDZ26IIC_W5A121C1TJC000/) 2017年4月5日最終閲覧